

Let's Know Hiroshima Castle.

# しろや！ 広島城



No.33



八条原城跡の碑

## 東広島市志和町に残る幕末維新期の城 —広島藩が計画した八条原城—

八条原城という城の名前を聞いたことがありますか？ 八条原城とは幕末維新の動乱期に、広島藩が今の東広島市志和町に計画していた城のことです。

### 1 広島城に代わる防御施設

広島城は、今から約400年前、中国地方112万石を領有していた毛利輝元によって築城されました。88棟の櫓<sup>やぐら</sup>を配し、三重の堀に囲まれ、弓矢・槍・鉄砲・騎馬を主力とした戦闘では難攻不落の城でした。ところが江戸時代の末期に大きな転機がやって来ます。開国により西洋から入ってきた高性能な鉄砲や大砲などの火器は、戦国時代から続いた戦闘の

方法を大きく変えていきます。射程距離の長い大砲の出現によって、かつて要害を誇っていた城郭の多くは、その軍事的な防衛機能を失っていきます。とりわけ広島城に代表されるような、海に面した交通の要地に築かれた平城では、射程距離の長い大砲を積んだ軍船からの攻撃には対応できません。このような情勢のなかで幕末の広島藩では、広島城に代わる防御施設の構築が急務となりました。

### 2 広島藩の取り組み

『芸藩志』<sup>げいはんし</sup>という広島藩の歴史書から、秘密裏<sup>ひみつり</sup>に進められた広島藩の取り組みを探っていきます。



図1 八条原城跡位置図

文久3年(1863)12月16日、広島藩主浅野家の分家で江戸青山に屋敷を構えていた浅野長厚が高田郡吉田<sup>ながあつ</sup>に移住します。このことが『芸藩志』には「広島は国家の有事に際して、守るに適した場所ではない。高田郡吉田<sup>へきち</sup>は僻地ではあるが、土地は広く、周りは山に囲まれた要害の地である。」と記されており、この時期には、吉田盆地を軍事拠点として北方の守りを固める計画が窺えます。さらに慶応4年(1868)8月9日の『芸藩志』には、「広島は交通の便は良いものの、平坦な地形であり、近年の戦闘では守ることができない。一方で賀茂郡志和は四方が山に囲まれ敵が侵入し難い。ここを非常の際に使用する場所に定めた。」と記されており、非常時には志和盆地も拠点とすることが決められたようです。

志和盆地は海岸から約20キロメートル離れた内陸に位置し、周囲を700メートル級の山に囲まれた面積約66平方キロメートルの盆地です(図1参照)。<sup>①</sup>海から離れた内陸部に位置する。<sup>②</sup>主要な



写真1 志和神社

出入口を封鎖することによって、容易に盆地全体を要塞化することができる。<sup>③</sup>盆地内で収穫する8,000石の米が長期の兵糧として利用できる。これらのことから志和盆地が選ばれたと思われます。志和西村の八条原には、藩主の邸宅・政事堂・米倉・練兵場・文武塾の講堂などが造られます。これらは志和盆地が要塞化されたときに必要な施設です。このほか鉄砲製造所や銃薬製造所の建築も計画されていました。

### 3 工事の始まりと終焉

慶応4年(1868)8月、やがて最後の広島藩主となる浅野長勲<sup>ながこと</sup>は、実の父である浅野懋昭<sup>としてる</sup>とともに、道家牧太・宮田真経<sup>まさのり</sup>・黒田益之丞・高間多須衛<sup>たすえ</sup>らの重臣を従えて志和盆地を訪れます。そして志和西村八条原に縄張りを行ない、表向きには藩主の別邸と練兵場の建設として工事が始まります。

志和盆地内の石は、大小を問わずここ八条原に集められ、敷地を取り囲むように、高さ1m、幅50cmの壁が造られました。中央部には藩主の邸宅が建てられ、これに接して、政治を行うための政事堂が造られました。藩主の邸宅には大きな玄関があり、24畳の大広間をはじめ大小60の部屋を全て合わせると440畳、庭には松の木40本を植えた『西志和村史』にあります。米倉が造られ、これまで広島城下に運ばれていた志和盆地内の米は、全てこの米倉に納められました。また、藩士の子弟にイギリス式練兵と漢学を教育するための文武塾が開設されています。

工事の開始に伴い、志和盆地に出入りする主要な通路6か所には柵門が設けられ、常時番兵を配し、



写真2 八条原城跡に残る石壁

「他藩の者は通行禁止。盆地内の住人であっても、庄屋が発行した通行札を持たなければ通行できない。」との規制が設けられます。10月からは、この規制はさらに厳しくなり、広島藩士でさえも通行するには通行札が必要になりました。

工事には、連日、数百人の職人と人夫が徴用され、盆正月も休まず続けられます。工事が続いた慶応4年(1868)<sup>ながみち</sup>\*から翌明治2年(1869)にかけて、広島藩主の浅野長訓や浅野長勲(明治2年1月に浅野長訓が引退し浅野長勲が藩主を継ぐ)が頻繁に来村して工事を検閲しており、この工事が緊急かつ重要であったことが窺われます。しかし、明治2年12月には工事は中止され、志和盆地の主要な出入口に設けられていた6か所の柵門も全て廃止されました。

工事が行われた慶応4年から明治2年は、戊辰戦争の内乱の真っ只中であり、戦乱の拡大も懸念されていたときです。明治2年5月の戊辰戦争の終結とその後の鎮静化によって、工事の必要性が薄れていった

のでしょう。<sup>\*</sup>慶応4年は改元され、明治元年となった

#### 4 その後の八条原

明治4年(1871)の廃藩置県において、広島藩の財産は広島県に引き継がれました。しかし、八条原の建物や敷地は広島県に移管されることなく、翌明治5年(1872)、旧広島藩主・浅野家の個人所有の別荘として売却されています。その代金の一部は、戊辰戦争で広島藩兵として働いた応変隊や神機隊などの隊士に分配されています。このような理由から、志和盆地の八条原で行われた工事の詳細は、歴史に埋もれたまま、今日に至ったのでしょう。

現在この場所は、地元の人から八条原城跡と呼ばれています。そこには志和神社(写真1)が鎮座し、裏山には苔むした石塁(写真2)が残り、広島藩の運命を担って計画されたにもかかわらず、僅か2年後には完成を待たずに放棄された八条原城の残影を今に伝えています。

(広島城ボランティア「ひろしま歴史探検隊」尾川健)

きんぱくがわら

## 金箔瓦はなぜ埋められたの？

～みんなで推理してみました☆

かつて広島城内の武家屋敷地だった上八丁堀(広島市中区)で、平成21年(2009)に行われた発掘の調査によって、金箔が押された鯨瓦と鬼板瓦が出土したのは皆さんの記憶に新しいところだと思います。金と朱漆の鮮やかな色彩を残してほぼ完全な形で見つかったのは全国でも初めてのことでした。この金箔瓦は、井戸跡の底から見つかったことも注目されていますが、出土の状況から井戸の中に投げ捨てられたのではなさそうです。発掘調査から、これらの瓦は毛利氏が城主だった16世紀末に作られたことなど様々なことが判明していますが、「なぜ井戸の底に埋められたのか？」という謎については、その成果からだけではわかっていません。今後さらなる研究で明らかになることが期待されています。

まだわからないことを逆手に取り、大胆にも来城の子どもたちを中心に「自由」にその理由を想像してもらおう、との試みを7月29日に実施した「お城イベント もっとしろうよ！広島城」の中で行いました。



井戸跡から出土した金箔瓦

「大胆推理！金箔瓦のなぞ」と銘打ったコーナーでは、ボランティア「ひろしま歴史探検隊」の方に「現在わかっていること・考えられていること」を簡単に実物の瓦の前で説明していただいた後、作られた当初のすがたに復元されたピカピカの瓦の前でそれぞれの解答を推理してふせん紙に書いていただき、掲示していきました。

その数なんと111枚。(お疲れ様です！一生懸命書いていただいたみなさんには「もとにやり」の限定手作りシールをさしあげました。)

現在わかっていること・考えられていることは、次のとおりです。

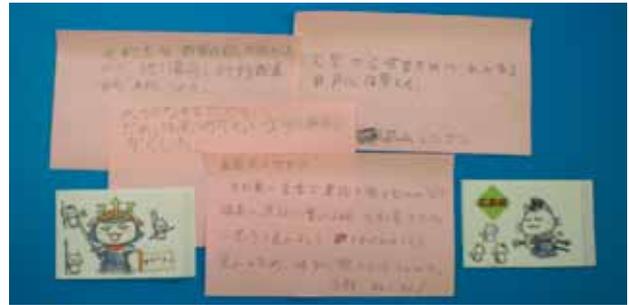
- ①**見つかったのは**、金箔の押された雄・雌一對の鯨瓦と板屋貝の模様の鬼板瓦(その下にもう一對、金箔の押されていない鯨瓦もありました)
  - ②**発見場所**は、江戸時代に武家屋敷があった所(天守閣の南東400mの場所、現在の中区上八丁堀)
  - ④**瓦が使われた場所**は、瓦が小ぶりなので天守閣ではなく、近くの櫓か門ではないか。
  - ⑤**瓦が作られた時期**は、毛利輝元がお城を建てたころ
  - ⑥**井戸が作られた時期**は、福島正則の時代
- つまり、毛利氏時代に造られた金箔瓦が、福島氏時代または浅野氏時代の早いうちに、**何かの理由**で屋根から降ろされ、福島氏の時代に造られていた井戸に埋められた、と考えられるのです。



ピカピカのレプリカを見ながら推理しました♡

答えてくれたのは小学生を中心に幼児から大人まで幅広い年齢の方々。ボランティアさんには優しく解説していただきましたが、幼い子どもさんには少し難しい話だったと思います。しかし、それなりにいろいろな回答を寄せてくれました。

多かったのは「大切なものだから」「宝物だから」。そして「盗まれないように」「壊れないように」、「井戸の中に隠した」「守ろうとした」のいずれかにつながる見解でした。「将来に残すため」という意見もいくつか見られました。



他にもたくさんの推理が寄せられました☆

また、毛利氏から福島氏へ、福島氏から浅野氏へと城主が交代するところに着目し、領土を去るとき、新しい為政者による破壊を警戒して、あるいはその手に渡るのを恐れて大事なものを隠したとの意見も見られました。豊臣時代の金箔瓦だから徳川家に気を遣った、福島正則の改易がらみで幕府に気を遣ったからと考えた方もいました。

ボランティアさんは鯨が水と関わりが深いこと、火事除けのおまじないの意味があることなども説明に入れてくださったので、中には「雨が降るように」「火事で避難した」「火事にならないよう」と書いてくれた方も結構おられました。中には、「鯨を飾っていたのに火事で守ってくれなかったので捨てた」というユニークな意見もありました。

その他には、犬が隠したとの珍解答や、毛利氏時代の東御門が廃棄されたためではないか、鯨のあった二の丸の鬼門に埋めたのではないかと、などもっと詳しくお聞きしてみたいような大人の推理もありました。

いずれにせよ、結果的に井戸がタイムカプセルのような役割を果たしたことで金箔瓦は保存され、その素晴らしい姿を今私たちの前に見せてくれることになりました。参加者の皆さんが「大切な」「宝物」と感じた金箔瓦のなぞが解き明かされる日がいつになるかはわかりませんが、この素晴らしい遺物を残してくれた当時の人々に感謝したいと思います。

(前野やよい)



編集・発行

財団法人広島市未来都市創造財団  
広島城

〒730-0011  
広島市中区基町 21-1  
電話：082-221-7512  
FAX：082-221-7519

平成24年10月26日発行

広島城利用案内

開館時間：9：00～18：00

(12月～2月の平日は9：00～17：00)

入館の受付は閉館の30分前まで

入館料：大人360円(280円)

小人180円(100円)

( )内は30名以上の団体料金

休館日：12月29日～1月2日(臨時休館あり)

ホームページ <http://www.rijo-castle.jp>



携帯サイト

📄「しろうや! 広島城」のバックナンバーは、広島城のホームページからダウンロードできます